

情動の志向性とフィクションの対象：実在論的理論の擁護

小関 健太郎 (Kentaro Ozeki)

東京大学（日本学術振興会特別研究員 PD）

物語のキャラクターに恐怖することやかわいそうに思うこと、ゲーム内のアイテムやイベントに魅力を感じたり嫌悪感を抱いたりすることのように、フィクションの対象（虚構的对象）に対して感情や欲求といった情動（emotion）を持つことは、フィクションに関する私たちの経験を構成する主要な要素のひとつであるように思われる。

一方で、虚構的对象についての情動をどのように理解するべきか、とりわけそれが真正の（genuine）情動であるのかという問題は、Radford (1975) や Walton (1978) といった影響力のある論考をひとつの端緒として広く議論されてきた（情動に関する「フィクションのパラドックス」）。よく知られているように Walton は、それは（少なくともその典型的な事例では）真正の情動ではないとする準情動説を提示したが、この主張には早くから一定の批判があり、それはむしろ真正の情動であるという見解も含め、虚構的对象についての情動と真正の情動の関係には依然として論争がある。

この問題をめぐって Kroon (2024) は、情動の志向性に着目して、「情動的状态とその対象に関する認知的観点主義」(CPE) と呼ぶ見解を展開している。Kroon によれば、志向性についての関係説（経験主体と対象の関係として志向性を特徴づける立場）の枠組みのもとで虚構的对象についての情動を真正の情動とみなす議論には、その実在論的な前提も含めて問題が見いだされる。しかし Kroon は、非実在論的な立場である Walton の準情動説も、虚構的对象についての情動の志向性のもっともらしさを説明できない点で問題があると主張する。CPE のポイントは、(1) 情動の志向性は現実の志向的關係なしに成立可能であり、(2) そのような事態は、少なくともその一面において、「主体の思考（=情動の前提となる想像や信念など）の観点から見て」情動的な志向的關係が成り立っている、という仕方で分析される（観点主義）、ということである。このように Kroon は、非実在論的な立場をとりつつ、虚構的对象についての情動的な経験は対象を欠くが志向的であるという見解を擁護する。Kroon そのような情動的経験を Q-情動 (Q-emotion) と呼び、Q-情動が真正の情動であるかは（非虚構的な）真正の情動との共通性の程度によって決まると主張する。

本発表の目的は、CPE に関する Kroon (2024) の議論は（虚構的对象に関する）実在論/非実在論の論争にとって決定的なものではないことを論じた上で、フィクションに関する情動の志向性とその対象についての実在論的な理論を擁護することである。私の見る限り、虚構的对象についての抽象的对象説やマイノング主義のような実在論的な立場に対する Kroon の批判は、それがもし妥当なものであるとしても、単独で非実在論を全面的に支持するようなタイプの議論ではない。虚構的对象に関する形而上学的な立場の妥当性はむしろ他の観点も含めて評価される必要があり、実在論的な立場が妥当かどうかはせいぜい進行中の論争として扱われるべき問題である。

他方で私は、虚構的対象についての情動も志向的であるという点では Kroon に同意する。その上で、Kroon の「観点主義」的な分析、すなわち虚構的対象や志向的關係についてのある種の文脈相対的な分析は、实在論的な枠組みにおいても展開できることを示す。この議論を明確化するために、Kroon 流の「観点主義」的な分析に相当するものとして、フィクションや志向的態度についての可能世界理論的な分析（可能世界分析）を導入する。CPE によれば、情動的経験の主体は、虚構的対象 X は F であるという想像や信念といった思考の観点において、X と情動的な志向的關係を持つ。ここで可能世界分析によれば、想像、信念、...の観点において虚構的対象 X は F であるということは、想像、信念、...の内容と整合的な（可能）世界において X は F である、ということの意味する。ただし Kroon の CPE と異なり、实在論的な立場のもとでは、虚構的対象についての情動は、経験主体と抽象的（またはマイノング主義的な非存在）対象との間の志向的關係を現実を持つ。このような实在論的な分析を示した上で、实在論的な立場に対する Kroon の反論を具体的に検討する。Kroon の反論の一部は、ここで問題になっているような情動を抽象的対象や非存在対象についての情動とみなすこと（例えば、抽象的対象を「かわいそうに思う」こと）の適切性に関するものである。この点に関する私の再反論は、（まさに Kroon が認めるように）想像や信念などの文脈（観点）内の事実をここでは同時に考慮すべきであり、この点で Kroon の CPE による説明と決定的な違いがあるわけではない、というものである。

次に、实在論的な理論の構成を踏まえて、Kroon の CPE を批判的に検討する。すでに述べたように、フィクションに関する可能世界分析は、Kroon の主張するような「観点主義」の内実のひとつの可能な明確化として適用することができる。しかし、この分析を CPE 自体に適用した場合、Kroon の議論からはいくつかの問題が帰結する。第一の問題は、経験主体と対象の間の「ある観点からの」志向的關係が成立するということが具体的にはどのようなことなのかという問題である。可能世界分析によれば、そのもっともらしい解釈は、現実（現実世界）と想像世界、信念世界、...との間に「跨る」関係であるか、ある想像世界、信念世界、...の内部の関係であるかのいずれかであるが、私の考えでは、これらの解釈にはどちらも難点がある。第二の問題は、实在の対象についての誤信念や事実と反する想像に基づく情動の説明である。实在の対象について事実と異なる信念を持っており、それが情動を基礎づけているとき、それはあくまでその対象についての（非事実的な信念に基づく）情動であるように思われる。实在論的な理論はこのような事例に関して、实在の対象との現実的な志向的關係を認めることができるが、CPE の説明からは困難が生じる。

最後に、以上の議論を踏まえて、虚構的対象についての情動の真正性の問題に関して、志向的経験としての情動という観点から展望を示す。

Kroon, Frederick W. 2024. Real Emotions for Unreal Fictional Objects: A Brentanean Perspective. *Philosophia* 52: 1317–1340.

Radford, Colin. 1975. How can we be moved by the fate of Anna Karenina? *Proceedings of the Aristotelian Society* 49: 67–80.

Walton, Kendall. 1978. Fearing fictions. *Journal of Philosophy* 75: 5–27.